



萩原一樹救急医

災害対策センター副部長の萩原一樹医師(救急医)は「同じ現場は一つもない。常に最善の策を考えながら

医療最前線

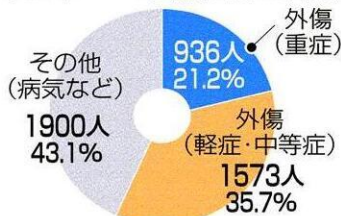
ドクターヘリ10年

県立中央病院から

〈258〉

医師が搭乗して救急現場に駆け付けるドクターヘリ(ドクヘリ)。山梨県内の出勤で最も多いのは事故などによる外傷患者だ。基地病院となっている県立中央病院高度救命救急センター

ドクターヘリ搬送者の内訳



※2012年4月～2022年3月を集計

多様な事故現場 臨機応変

10年で4400人搬送 外傷50%超

救命に当たっている」と話す。

外傷者は936人搬送した。

た状態。ドクヘリで向かった萩原医師が超音波検査すると、腹部内で大量の出血が確認されたという。応急処置を進めながら病院に対して必要な手術内容と準備を指示。到着後、すぐに萩原医師が止血などを一命を取り留めた。ドクヘリは遠方からの搬送時

ドクヘリの搬送者は昨年度末までの10年間で4409人。このうち外傷患者は2509件で全体の56・9%を占める。車社会の山梨では交通事故が多く、農作業中の事故もある。外傷により命の危険が迫った重症送の優先順位を判断するこ

「警察や消防、道路間を短縮するだけではなく、医師が搭乗することで患者の評価を迅速にすることができ」ドクヘリの役割が最大限に発揮できた事例だったという。

数年後の運用開始を視野に入れて準備を進めている。「あらゆる手を尽くして救命し、可能な限り後遺症も軽減していきたい」と萩原医師。命と向き合う日々は続く。

2012年4月に山梨県全域でのドクヘリ運用が開始されてから10年が経過した。県立中央病院の医師にドクヘリが果たしてきた役割を聞く。

とも。「管理者と連携しながら臨機応変な対応が求められる。萩原医師はそう語る。

今、高度救命救急センターはさらなる取り組みとして、検査や手術を1カ所です

萩原医師が忘れられない搬送事例に郡内地域で起きた自動車の単独事故がある。事故を起こした男性運転手は意識がもうろうとし

第2、4木曜日に掲載し

転手は意識がもうろうとし

第2、4木曜日に掲載し